

格物致知について

この詞（ことば）は、通例、朱熹により「物に格（いた）りて知を致す」、王陽明により、「物を格（ただ）して知を致す」と解釈されます。格を「いたる」と読むのは書経や詩経、「ただす」と読むのは「孟子」によるようです。

「いたる」とするのは各からきます。各は  で  と  足形からなり、 に降りて来る、それで「いたる」とするのが原義のようです。

格は  とあり、木と各の組み合わせでは木を伝って降りて来るイメージで「いたる」と直結します。

しかしそれが原義ではないようで、  木が交差している様で、相反するイメージを表わすとされています。乱雑に交差している場合には、格闘という詞から分かるように戦うことを表わします。きちんと交差している場合には、規格という詞から分かるように、基準となるもので、それで正すこととなります。

ただそれに限らず、価格、別格、格差、格納、厳格等々多くの使い方がされます。人格のように、格はそのものの本来あるべきあり方を示す詞にも用いられています。

物は   牛と土を耕す鋤の形です。殷代、甲骨文字の時代にこの文字が出来ていますので鉄製の鋤ではないでしょう。甲骨に文字を刻して占うのは帝のみですから、帝の園では青銅の鋤であったかもしれません。牛に牽かせ耕したのでしょう、耕したのは土地ですから、物とは大地を意味したと考えられます。

後漢の「説文解字」では、物を「萬物なり」「牛を大物と為す。天地の数は牽牛より起る。故に牛に従う」としました。これは「易経」からきており、天は奇数（1, 3, 5, 7, 9; 陽）、地は偶数（2, 4, 6, 8, 10; 陰）、奇数を足せば 25、偶数では 30、天地の数の合計は 55 となり、「55 の数（陰陽）が変化して、鬼神を行なう所以なり」、とあります。「牛を牽（ひ）くこと」は耕作することですが、それで天の数が「起る」の意味は筆者には分かりません。

「易経」「繫辞伝」には、伏羲氏が「仰いで天文を觀、俯しては地理を察す。この故に幽明の故を知る」とあります。

幽とは人には見えない世界です。種から芽を出し茎や葉、枝葉が育ち、花を開き、実をつける、これは見えます。何かはその現象を起こさせていますが、その何かは見えません。そこに何かの力が働いており、それを理解しようと伏羲は努力した、とみたてたのでしょう。

伏羲は森羅万象を観察し、陰--陽--の組み合わせ、八卦☰ ☷ ☱ ☲ ☳ ☴ ☵ ☶ ☷により分類し、それを類推しました。易経ではそうさせている主体を鬼--神 --としました。

鬼  は頭部のみ強調された形、神  は示と申  との組み合わせです。鬼とは身体が土に帰し魂が上昇してそのあるべき処に帰すものとされますので、「鬼は帰」とされ、死者の霊ともいえます。示は祭壇です、申は雷光です。雷光は自然力の王、自然界の力を代表しています。災厄を逃れ、福を求めて自然力を祭祀することが神のイメージでした。祖先の霊を祭祀するのも、同族の安寧には重要でした。

動物の仲間であった生き物を人とし、人の世を造りだしてきた祖先を象徴する祖霊を鬼とみましよう。四季をもたらし、生命を育んできた自然力を神とみましよう。幽界の鬼神が陰陽を以て見えるようにした森羅万象（物）の本来のあり方としてふさわしいものが格と考えることができます。

ただその格は相反が導入されておりますので、乱れもすれば、秩序立つものでもあると考えられたようです。

致は  至と女ですが、原字は左図のように女でなく人です。至は  矢と一（地面）で射た矢が落ちた地面です。重要な場所を決める場合にこうして決めることがあったようです。その処に人が辿り着くことを意味しますので、到達することをいいます。

知は  矢と  からなります。「説文解字」では矢と口からなり「詞（ことば）なり」とあります。「識（し）ること敏（びん）なり、故に口に出ずの疾（とき）こと矢のごときなり」と解説されています。これは原義から遠いものです。

矢は誓いに用いられます。  の中には誓いの詞が納められています。為し遂げすることを誓って神に祈念したと考えられます。

「致知」とは知に致るですが、知を致す、原義では誓っていますから、なんとしてもそれを為し遂げようとする意志が込められています。

明明徳、親民、止於至善があつてのこととします。

易経、繫辞下伝には、「古者（いにしえ）包犧（ふっき）氏の天下に王たるや、仰（あお）いでは象を天に観（み）、俯（ふ）しては法を地に観、鳥獣の文（ぶん）と地の宜（ぎ）を観、近くはこれを身に取り、遠くはこれを物に取る。ここにおいて始めて八卦（はっか）を作り、もって神明（しんめい）の徳を通じ、もって万物の情を類す」とあります。

神明之徳とは、包（伏）犧氏（人面蛇身）が、人に人間らしい生活をする術（わざ）をもたらし、社会生活を営む基礎を造ったことを指します。神農や黄帝（この帝は軍事に長けていました）がさらに之をすすめますが、人、半獣半人、獣、半神半人、神が天上天下に入り乱れて大争乱が起ります。これに懲りて、天上と天下の通路を断ち、天界に地上の争乱が及ばないようにしました。

この争乱を避けるには太陽のように誰にでも公平にその光を与える公正の権化のような堯という帝が用いられました。日月のように誰の目にも明らかな徳、それが誤れば、日食のごとく誰の目にもその誤りが明らかになります。

祖先を疎かにして秩序が乱れましたから、孝の権化のような舜が用いられました。後妻がその子を偏愛するあまり夫を誘い兄に当たる舜を騙して殺そうとしました。しかし、舜はそのような両親にも孝を尽くし、義弟を慈しみます。

親の左辺は木で作った位牌のことが原義のようです。民がそれを見る形ですので、親は祖先を祭祀することが原義のようです。親民とは、民に祖先を祭祀する、孝を薦めるものです。

ところが、堯や舜の明德は極端に過ぎますから、天には 10 個の太陽が現れ、人々は旱魃に苦しみます。9 個の太陽を射落とすことになりました。そうすると大雨長雨となり、大洪水に苦しむことになりました。

禹が山野をかけずり回り、山を削り、水路を作り、川を海に流し込み、身体がすりへり、手足がたこだらけになったとあります。洪水を治め、九州の地質、産出する特産物を考慮し、税額を定め、国家を運営する基礎を造りました。天帝が禹の労苦に報いて河から図を出しました。「洪範九疇」、天下を治める規範九条のごときもので、これは殷の箕子から周の武王に伝授されることになります。

この功罪に鑑みて、極端を避け「中」を執ることが理想とされました。

「論語」の「堯曰第二十」には「天の曆数は爾（なんぢ）の躬（み）に在り、允（まこと）に其の中（ちう）を執れ、四海（しかい）困窮せば天祿（てんろく）永く終へん」とあります（堯が舜に告げた詞とされます）。

天の曆数とは易の天地合計 55 の数と関連づければ、天が起こす種々の作用の契機を考察したものと考えられます。伏羲以来の観察により、八卦によりそれが知られるようになったこともあります。その「中を執れ」を行えば、四海とは東西南北の地の果て、困窮とは困（きわ）め窮（つ）くすと読むそうです、そうすれば天からの賜り物を永くいただくことができるとしています。「重んずる所は民の食喪祭。寛なれば則ち衆を得、信なれば則ち民任ず。敏なれば則ち功有り、公なれば則ち民説（よろこ）ぶ」としています。

これが至善の境地でしょうが、止於至善、その境地に止まり実施し続けることは至難です。顔回は三月止まることが出来たそうですが、普通の人是一日ともちません。誠に「云うは易く行ふは難し」というのが実相です。

こういった昔からの考え方が「大学」の「明明徳、親民、止於至善」、と表現されていたのでしょう。朱熹は、「明明徳、親民、止於至善」であるためには「格物致知」であらねばならないとします。その修養なくしては、明徳は天の理、人の性、天の理は仁義礼智、それは人である以上誰にも備わっている、そのことが自覚できないとします。自覚できないのは、情（喜怒哀楽）や慾により明徳が蔽われ汚されているとします。その蔽いをとり汚れをぬぐい去って明徳が現れるようにすることを「明徳を明（あきらか）にする」こととといいます。

ただ、天理は見えないものです。実際のところ見えない以上分かりかねます。天理が仁義礼智でこれが絶対的に善と想定されていることに逡巡します。日本の伝統では天理には善いものもあれば悪いものも、いろいろなものがあると考えるでしょう。日本の神様には和魂（にきたま）、荒魂（あらたま）、幸魂（さきたま）、奇魂（くしたま）とか巾をもたせ相反する想定もします。そのため曖昧模糊となりますが・・・日本人の中には朱子学を息苦しく窮屈に感じる人が多いのでしょ

う。

2025. 01. 31